



熊川 勝さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：12月26日

ここを出る時のことを 何も思い浮かべることができないのです

津波で奥様を目の前で亡くした熊川さんは、今でも仮設に祀る遺影に向かって語りかけ続けているそうです。これまでの出来事を「あの時こうだったら」「もっとこうしていたら」と振り返るたびに悲しかったり悔しかったりするけれど、まもなく3年目を迎える二本松市塩沢での暮らしにすっかり馴染み、自治会長として毎日みんなとどう楽しく過ごすのが元気の源、とおっしゃいます。



▲「妻とは見合いましたが、一目惚れでした」と照れながら話してくださった熊川さん

これまででありがとう」と言ううちに、妻が波に引き込まれてしまいました。私はウィンドブレーカーが浮輪替わりになったのか、どうにか屋根に登り、254号線の古い橋桁に網が引っかかっているのが見えたので流されている家から飛び移りました。

■理不尽な思いもしたけれど、さまざまなお会いに感謝しています

その日は役場へ避難し、裸のまま毛布1枚で一晩過ごしました。翌朝「バスに乗れ！」という声と共に大勢の人たちが津島へ向かってしまい、取り残された私は長兄を頼って南相馬市に移りました。ここでも避難指示が出され次兄と旅館に移動後、私は横浜に嫁いだ娘を頼ることにし、僅かな情報を頼りに福島空港へ向かいました。そこで青森から来た親切な青年と出会い、おかげで那須塩原から新幹線で横浜まで辿り着きました。娘に妻を助けられなかったことを詫言ると「お父さんだけでも生きていてよかったです」と答えてくれました。

テレビで4月14日から浪江の遺体捜索が始まることを知り、妻に会いたい一心で福島へ戻りました。

2011年8月にこの塩沢の仮設住宅への入居と同時に自治会長を務めています。最初は約90世帯あったのですが、現在は63世帯100人弱。小学生は1人だけで、もう少しいると賑やかでしょうけれど、今年のクリスマス会には普段出て来ない男性も参加しました。他にも二本松自治会連合会やランドゴルフ等、いろいろな団体の会長をしており、結構忙しかけています。また、仮設での交流会では皆さんと会話を楽しんでいきます。

浪江に早くお墓を作り、妻を安らかに成仏させてやりたいと思っています。私自身はこれから復興住宅に入る気もしないし、先が見えない今、まだ何も考えられないのが正直な気持ちです。

■私だけが大了した怪我もなく、助かりました

あの日の午前中は中学校の卒業式に出席し、午後のグラウンドゴルフからの帰り道で地震に遭いました。道が浮き上がり、電柱が倒れてくる中、車を飛ばして帰宅すると、両膝の手術をして歩行が不自由だった妻が私を見て、安堵した表情を浮かべました。ふと見上げると今まで真っ青だった空が突然真っ暗になり、津波が家を直撃しました。妻を抱え階段の踊り場まで駆け上がりましたが、直ぐに波に囲まれてしまい、死を覚悟しながらひつしと抱き合い「これで終わりか、

これまででありがとう」と言ううちに、妻が波に引き込まれてしまいました。私はウィンドブレーカーが浮輪替わりになったのか、どうにか屋根に登り、254号線の古い橋桁に網が引っかかっているのが見えたので流されている家から飛び移りました。

■理不尽な思いもしたけれど、さまざまなお会いに感謝しています

その日は役場へ避難し、裸のまま毛布1枚で一晩過ごしました。

2011年8月にこの塩沢の仮設住宅への入居と同時に自治会長を務めています。最初は約90世帯あったのですが、現在は63世帯100人弱。小学生は1人だけで、もう少しいると賑やかでしょうけれど、今年のクリスマス会には普段出て来ない男性も参加しました。他にも二本松自治会連合会やランドゴルフ等、いろいろな団体の会長をしており、結構忙しかけています。また、仮設での交流会では皆さんと会話を楽しんでいきます。

浪江に早くお墓を作り、妻を安らかに成仏させてやりたいと思っています。私自身はこれから復興住宅に入る気もしないし、先が見えない今、まだ何も考えられないのが正直な気持ちです。

浪江の ころ通信



・第32号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のころ通信」が編集・発行されます。

浪江のころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ 再会・浪江のころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から2年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のころ通信／第32号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のころ通信」宛
FAX.0243(22)4218



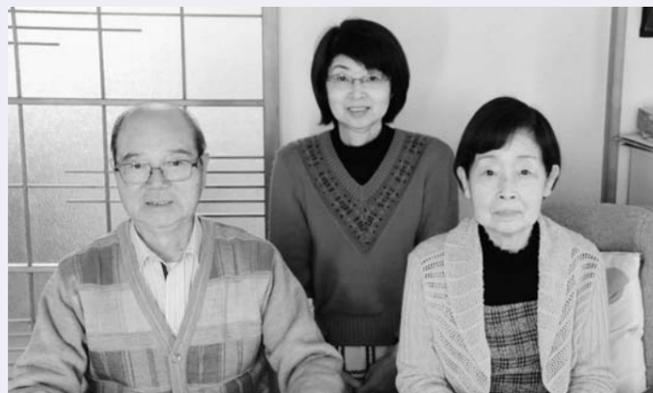


伊集院律子さん(大堀)

取材者：浪江町役場 舩田・嶋原
取材日：12月5日

音楽が結んでくれた人との繋がり

『浪江のこころ通信』第1号に掲載の伊集院律子さんは、当初の取材時には新潟県上越市に避難されていましたが、震災の年の10月末から南相馬市でご両親と3人暮らしをなさっています。現在お住まいの借上げ住宅の一室でピアノを教えるだけでなく、合唱団の指導や自らも合唱団員として歌うなど音楽と関わることで生き生きと過ごしていらっしゃいます。



▲ご両親と一緒に
(左から)父 近藤 洋さん、律子さん、母 近藤スミ子さん

上越にいたときは、これからどこで生活したらいいのか漠然としていて、どこに住むか当てがない状態でした。
そんな時、浪江の時から関わっていた南相馬市の合唱団「ゆめはつと」のメンバーの方が、福島に戻ってこないかと言って住まいを探して下さり引っ越しすることができました。ひとりではど

う動いてよいかわからなかったのですが、親身になってくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。改めて人のつながりの有難さと大切さを感じました。
南相馬市は浪江に近いし、気候もほぼ同じなので住みやすいところですよ。ずっと気になっていたのでお墓も最近直すことができました。
ここに住んですぐに、浪江の子どもや近所の子どもがピアノや音楽を習いに来てくれました。受験を控えている生徒もいて合格した時は本当に嬉しかったです。昨年4月には、避難先から原町に戻ってくる子どもが増えて、今は小学生、中学生、高校生に大人の方までレッスンに来てくれます。合唱団の指導としては、「ゆめはつと合唱団」だけでなく、福島で活動している「浪江混声合唱団」と、相馬市で練習している「ゴール・かしま」にも行っています。そのほかに趣味として、自分たちで楽しむ10人程のアンサンブル「エピアノ」で歌っています。

浪江町の友だちには、用事に合わせて東京まで会いに出掛けたり、メールをしています。住まいが離れてしまった孫たちの姿は、フォトフレームから送られてくる写真を見たり、保育園の行事がある時は岐阜県の下呂市に会いに行きます。それから気掛かりなのは、浪江町で教えていた生徒たちが、避難先で元気なのか、音楽は続けているのかなということ。音楽をやめるのはもったいないので続けていければと思います。生徒たちが音楽を好きでいて欲しいですね。
色々なことが不安と言えませんが、何をどう考えていいかわからなかった震災当時とは違います。浪江にいた時より忙しい日々ですが、目一杯やれて充実しています。自分が出ることをやれるのは良いです。好きなことを仕事にしているので、仕事がある以上は続けていきたいと思っています。



曾根 行正さん・明美さん(権現堂)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木
取材日：12月25日

お世話になった皆さまにまた会える日を願って！

明美さんのご両親と息子さん、そして愛犬クッキーとフェリーに乗り、震災5日目には、叔母夫婦が暮らす北海道恵庭市へ。当時中学校を卒業したばかりの息子さんも、3月には高校を卒業します。「3年通いました。ここで…」と、時間の経過をあらためて実感しながらお話をいただきました。



▲愛犬クッキーも一緒にポーズ！

■浪江町から恵庭市へ
父の代で3代目となる「松乃家」を両親とともに営んでおりました。あの日は、お店が休みだったのでみんな家におり、子どもは中学校の卒業式でした。式典が終わり、昼食を済ませ買い物に行こうと、私が外に出たら珍しく犬が吠えたので戻ったところ揺れが始まり、ものすごく怖かったことを覚えています。
夫は仕事で、同僚とトラックで走っていて、茨城の鹿島の辺りで地震に遭いました。無線で

やりとりし、日立の山の方から裏道を通り、迷いながらも茨城で6号線へ出ました。津波を被った後で道路には冷蔵庫などが転がっていたそうです。普通なら4〜5時間くらい道のりだけで、20時間以上かかって富岡まで来ました。会社の社長が迎えに来てくれて、原町から川俣に避難して、3日目に家族と合流しました。それから新潟周りで車にガソリンを入れ、フェリーで北海道に向かい、恵庭市にいる叔母のところへ一旦お世話になりました。避難生活が長引くことがわかったので、その後叔母の家に近い団地に移りました。はじめは両親も同じ団地にいましたが、今は近くのマンションで暮らしています。

■楽しみをひとつずつ広げて
子どもはこちらの高校に入學しました。はじめは誰も知りませんでした。入学後すぐに宿泊学習があり、それをきっかけにお友達が増えて楽しく通学してくれるようになり、安心しました。今は進学したいと頑張っています。両親は、越して

きた年は市役所の人たちが持つてきてくれる企画によく参加していました。知らない所に来たので、楽しみにしていたようです。最近は地元のNPOから、餅つきや日帰りバスツアーに誘われて行っています。また叔父が苦小牧に父を釣りに連れて行ってくれて、その時は大漁だったようです。父は大好きな釣りができてとても喜んでいました。本当に叔母夫婦には大変感謝しています。